

歴史文化遺産を活かしたまちづくりを推進します

王仁博士ゆかりの地訪問 民間交流の拡大に期待

日本に漢字と論語十巻を伝えたとされる王仁博士ゆかりの地を訪ねる韓国霊岩郡生誕地史跡訪問ツアーを8月21日から3日間実施しました。ツアーには市長を団長に、観光協会、王仁

天満宮がある神埼町竹原地区役員、一般市民など33人が参加。

訪問団一行は、霊岩郡の金逸太（キム・イルテ）郡守をはじめ、行政関係者や王仁博士研究者などの歓迎を受け、博士生誕地の史跡や施設を訪れ、お互いに交流を深めました。



▲王仁博士の遺跡を訪れ、説明を受ける訪問団



▲金郡守と松本市長

歓迎式

釜山の金海空港に降り立った訪問団は、王仁博士生誕地の霊岩郡へ向け、バスで4時間の旅し、釜山との直線距離は福岡釜山間とほぼ同じです。市街地を離れると、低い山々と水田が広がり、日本の農村に似た風景が続きます。

神埼市を午前8時に出発しましたが、霊岩郡に着いたころはもう夕方。

さっそく歓迎式が行われ、金郡守から「王仁博士は日本に渡り飛鳥文化の花を開かせました

神埼市では王仁天満宮を生かした新しい事業に取り組みられているということですが、これを機に協力をしたい」と歓迎のあいさつがありました。

松本市長も「神埼市の王仁天満宮はまだ未整備ですが、今後計画的に歴史文化遺産を活かしたまちづくりを行うことにしています」とあいさつを返しました。

続いて歓談に移り、松本市長が王仁博士に関する霊岩郡の史

王仁博士と王仁天満宮

王仁博士は百済から日本に渡来し、漢字と論語十巻を伝えたとされる人物です。古事記や日本書紀などに記述があり、古事記には「応神天皇の命令を受け、百済が献上した人の名は和邇吉師という。論語十巻と千字文一巻の併せて十一巻を献上した」と記されています。また日本書紀にも、「王仁」の名前が登場し、

「神天皇の招きで渡来して太子の師となり、帰化した」という記録があります。

一方、韓国には国史である歴史書に「王仁」の記述は見当たらず、架空の人物という説もありますが、王仁に関する伝承や地名などが残る全羅南道霊岩郡で

跡整備が進んでいることに敬意を表すと、金郡守は「子孫として偉業を伝えていくのは当然。神埼市民の皆さんが視察して帰られることが新たな歴史の発展につながる。継続的な往来ができれば」と応じました。

また、夜は歓迎晩餐会が催され、金郡守をはじめ行政関係者や王仁博士顕彰会、王仁文化研究所の皆さんを交えて、和やかな交流が行われました。

は、生誕地として史跡が整備され、毎年祭りが開かれています。日本における史跡としては、大阪府の枚方市に王仁博士の墓といわれる自然石があり、「伝王仁墓」として大阪府史跡に指定されています。

神埼市でも神埼町竹原に「神社」があり、境内に「王仁天満宮」の石塔があります。建立は寛政8年（1796年）と記されていますが、目的や歴史的背景については記録がなく、不明です。しかし、市内には韓国とのかかわりのある遺跡が多く残っていることや、有明海が大陸文化の流入ルートの一つだったことは確認されており、王仁博士が佐賀平野に足跡を留めた可能性は推定されます。

史跡訪問

翌日は、秀麗な姿の月出山の麓にある王仁博士の史跡を視察しました。この史跡は1985年に整備が始まり、約5万坪という広大な敷地に王仁博士祠堂をはじめ、博士像、墓、史料展示館、王仁学堂、千字文碑などの施設が整備され、その規模に驚かされます。

訪問団は朴光淳（バク・クァンソン）王仁文化研究所長たちの案内で、展示館や祠堂などを見学。展示館には王仁博士の足跡を紹介する資料が展示され、日本への渡航ルートに神埼を加えられたことも紹介されました。博士の位牌と肖像画が飾られている祠堂では全員が参拝して交流の今後の発展を祈りました。

このほか王仁博士が誕生した家の礎石や、水を飲んだ聖泉、



▲王仁博士の祠堂を参拝する訪問団

勉強したという石窟なども残されていきました。聖泉の水を飲むと聖人が生まれるという言い伝えもあるそうです。

続いて訪れた霊岩陶芸博物館では日韓陶芸作家の作品も鑑賞。すぐ近くには王仁博士が船出したと言われる上台浦があります。

釜山の街

最終日は釜山市内を見学。海産物が集まるチャガルチ市場や庶民的な店が並ぶ国際市場などを訪れましたが、300万都市の胃袋を支えるチャガルチ市場には、種類も量もびっくりするほどの海産物が並んでいました。そして、いずれも人が多く活気にあふれていました。

人口規模からして当然のこととはいえ、地域の活性化に悩む私たちにとっては、うらやましさを感じる旅の締めくくりとなりました。

市としては、今後も交流を続けていきますので、市民の皆さまの参加をお願いします。

◎問い合わせ先

神崎市役所 商工観光課
☎ 37-0107

地域の活性化に向け 神埼ブランドの菱焼酎を

地元産の菱を使った神埼ブランドの菱焼酎を作ろうという取り組みが始まり、9月5日に1回目の菱の実採りが行われました。

菱の実採りは、神埼町大依のクリークで、松本市長をはじめ、地元の中野良典区長と市職員5人が行いました。

今回の取り組みは、すでに「菱娘」の銘柄で菱焼酎を製造、販売している田中酒造（佐賀市）と共同で行われます。

菱焼酎は当初、地元産の菱を使って開発されましたが、原料の安定的確保などの問題から、

歴史学ぶ「神埼塾」スタート



して育て、地域の活性化につなげようというのが今回の取り組みの目的です。

1回目の採取では1時間でおよそ4キロの菱の実が収穫されました。さらに数回採取を行い、まとまった量を確保した上で、乾燥した実を田中酒造に納入、11月上旬に仕込みに入る予定です。



中国産の菱が利用されています。神崎市では、昔からクリークに自生する菱の実が食用として利用されてきました。秋には祭りや街頭などでも販売され、郷土の風物詩ともなっています。

この特産物ともいえる菱の実を使った焼酎を神埼ブランドと

神埼市の歴史文化遺産を知り、まちづくりに生かそうという講座「神埼塾」が9月5日から始まりました。

まず、市長が「市内の豊富な歴史文化遺産を活用して、市民と行政が協働して元気なまちをつくりたい」と塾開催の狙いを話しました。

続いて、神崎市役所の八尋係長が「旧石器時代・縄文時代の神埼」と題して講演。「これまで山麓部の神埼地区から千代田の平野部にかけての遺跡が注目さ

れてきたが、今後は脊振地区の城原川沿い段丘で保存状態の良好な遺跡が見つかる可能性が大きい」と語り、旧石器時代からの先人の生活跡が市内全域に及ぶ可能性を示唆しました。

「神埼塾」には92人が登録、同日は7人が参加、約3時間にわたって熱心に聴講、質疑も交わしました。来年2月6日まで、15講座を予定しています。

◎問い合わせ先

神崎市役所 市長公室
☎ 37-0102